

幼稚園における「お手紙ごっこ」活動（1）

— 手紙の形式と機能 —

○藤岡真貴子 秋田喜代美 無藤 隆 安見克夫 荒牧道子 熊本一美 中島静江
 （お茶の水女子大学）（立教大学）（お茶の水女子大学）（板橋富士見幼稚園）（木内嶋の家幼稚園）（中央会堂幼稚園）（すずらん幼稚園）

【問題と目的】

読み書き習得初期の子どもによく行われる保育実践の一つに、「手紙を書く」活動があげられる。しかし、子どもが生活の知識として、いつ頃からどの程度「手紙」の知識を持ち、実際にどのような手紙をやり取りしているのかを明らかにした研究はほとんど見られない。遠藤・無藤(1991)は、「お手紙ごっこ」の保育実践の記述及びその教育的効果を検討しているが、単園で自然場面における縦断的に収集した手紙を分析したものであり、複数の園による保育実践の違いや、子どもが手紙を書いた条件の違い等が考慮されていない。そこで本研究では更にこの2点を考慮し、複数の園を対象に、各園での関わり方の違いが子どもの書く手紙にどのような影響を与えるのか、また手紙を書く時期、条件を統制し、年齢差を明らかにすることを目的とする。また、手紙の知識と機能の中でも特に、手紙のコミュニケーションの道具としての側面、すなわち「誰に、どのような形式で、何を書いているのか」を検討することに主眼を置く。

【方法】

(1)対象：都内私立幼稚園4園（各園での「お手紙ごっこ」に対する環境設定は次のように異なる。ホ・スト・手紙の用紙・スタツ°等の環境を常時設定している園、一時的（年賀状作り）にスタツ°を導入している園、今後新たに環境設置を行う予定の園、特別な環境設定を行っていない園）。

(2)時期：1994年2月下旬～3月。

(3)手続き：各クラスで担任が園児に指定の用紙（B6ハガキ版無地）を配布し、「お友達にお手紙を書いて下さい」と教示し、自由に手紙を書いてもらった。

(4)分析方法：①分析単位：一斉実施ではあるが、手紙を書かなかつたり、一人で複数書いた子どももいたため、分析の単位は「手紙」とした（Table 1 参照）。

Table 1 回収された園別手紙数

	年長	年中	年少	合計
常設園	-	44	-	44
一時	18	11	11	40
設定予定	25	16	-	41
非設定園	75	94	23	192
合計	118	165	34	317

②分析の観点：1. どのように書くのか 「A. 用紙の使用」表裏両面を使用するか、片面のみか。 「B. 宛名書きの形式」(a. 郵便番号 b. 切手 c. 受取人住所 d. 受取人の名前 e. 差出人の名前 f. 日付)

2. 何を書いているのか 「C. 手紙の内容」(a. あいさつ b. 約束 c. 出来

事報告・伝達 d. お見舞い e. 共有体験 f. お祝い g. お礼 h. 質問 i. その他 j. 不明)

【結果と考察】

(1) どのように書くのか：①「B. 宛名形式」の中で、最も記載が多いものは、「d. 受取人名前」(手紙全体の72.9%)、次いで「e. 差出人名前」(52.0%)であった。

②年齢差：「B. 宛名形式」で「a～fの記載が全くないもの」「1種のみ」「2種以上」は、それぞれ年長13.6%, 45.7%, 36.8%、年中34.1%, 47.3%, 61.8%、年少52.3%, 7.0%, 1.4%で有意差が見られたが($\chi^2=99.22, df=4, p<.001$)、年長と年中では差は見られなかった。

③園差：「A. 用紙の使用」で、常設園(77.3%)と設定予定園(70.7%)で両面を用いた手紙が有意に多く($\chi^2=68.58, df=3, p<.001$)、「B. 宛名形式 e. 差出人名前」の記載も、前述の2園(68.2%, 75.6%)で有意に多く見られた($\chi^2=18.69, df=3, p<.001$)。また、常設園でのみ「c. 受取人住所」の記載が見られ(20.5%)、逆に「a. 郵便番号」の記入が全く見られなかった。これは、常設園の「手紙」の用紙形式の影響と考えられる。

(2) 何を書いているのか：①「C. 内容」の中で最も多かったものは「b. 約束」(文章の書かれている手紙全体の47.2%)。次いで「a. あいさつ」(29.7%)、「i. その他」(18.5%)、「e. 共有体験」(12.8%)。一方的な情報の提供や要求ではなく、園での生活を基盤とし、相手とコミュニケーションすることを意図した内容が多いといえる。

②年齢差：「内容1種類のみ」は、年長48.3%、年中35.8%。「複数」は、年長35.6%、年中10.9%($\chi^2=9.16, df=1, p<.05$)。また年長と年中の個々の内容比較では、「b. 約束」では差がなかったが、「a. あいさつ」($\chi^2=4.46, df=1, p<.05$)、「i. その他」($\chi^2=6.21, df=1, p<.05$)、「e. 共有体験」($\chi^2=14.81, df=1, p<.001$)で有意な差が見られ、加齢に伴い、多様な内容が書けるようになるといえる。

③園差：常設園(35.5%)と非設定園(36.4%)で、「a. あいさつ」が多く見られ($\chi^2=12.19, df=3, p<.001$)、園を離れる先生に宛てた手紙が多かった設定予定園(66.8%)で、「i. その他」($\chi^2=49.44, df=3, p<.001$)が多くなっている。

(3)まとめ：文字習得期の子どもにとって、「手紙を書く」といった行為は、文字による他者とのコミュニケーション手段として機能し、加齢に伴いその内容も多様化すること。また、保育の中で日常的に手紙に接することにより、手紙固有の形式や知識の獲得が促進される可能性が示唆された。今後は、手紙の内容とかな文字習得率との関連、子どもの実際の交友関係と手紙のやり取りの関係等の検討が必要と考える。